

慎太郎と裕次郎

首藤 静夫

当クラブの読書会（読もう会）で『芥川賞受賞作品集 第五巻』（文藝春秋社）を半年にわたり読み比べてきた。第五巻に収載されたのは、五味、清張、安岡、吉行、小島、庄野、遠藤、石原、近藤（啓）、菊村、開高、大江の各氏の作品である。受賞者のいずれもが、その後作家として名をなした珍しい一巻である。昭和二十七年から三三年の受賞作品だ。

最後に石原慎太郎の『太陽の季節』を取り上げた。

これは昭和三十年の受賞作で、順番からいって最後というのではない。幹事の私の一存だった。この作品は発表当初から賛否両論があり、文藝春秋社内でも意見が分かかれ、審査委員の先生方も評価が割れて激論になっている。

作品は当時の高校生をモデルに、セックスと快楽と暴力に明け暮れるアンチ・モデルがテーマである。第五巻のほとんどの作品が戦争の傷跡を残しているのに比し、この作品は戦争をまったく感じさせない。

振り返れば昭和三十年は前年から神武景気が始まり、政治の面では保守大合同、社会党左右合併、共産党の武力放棄宣言など「もはや戦後ではない」時代の幕開けだった。そこに登場したのがこの作品だ。

作品では、大人の文化・伝統的モラルに挑み、あるいは無視し、新しい時代は自分たち若者のものだと言張するエネルギーが横溢している。まさに太陽の季節なのだ。そこを鑑賞したかったが参加者の意見はそうでもなかった。作品として洗練されていない、深みがないとする意見が多かった。

この映画も作られた。裕次郎と北原三枝の主演で見たかった。都会のチヨイ悪を演じるイメージは二人にぴったりなのだが。いずれにしても裕次郎と三枝が出る映画は昭和三十年代という時代の気分がよく出ている。裕次郎は映画で歌で新時代を切り拓いたといえるだろう。

石原兄弟の仲がどうだったかは知らないが、二人とも時代の寵児となり、その後今日までつづく日本文化の担い手として記憶されることだろう、少し軽い文化ではあるが。